

140-years history of  
JAPANESE WINE



USHIKU

KOSHU

令和2年6月19日 日本遺産認定

# 日本ワイン140年史

～ 国産ブドウで醸造する和 문화の結晶～

茨城県牛久市



山梨県甲州市



ワイン文化日本遺産協議会

# 日本ワイン140年史

～国産ブドウで醸造する和文化的結晶～

140 years history of Japanese wine

STORY 1

## 官営から民営へ。日本ワイン史の第一歩が刻まれる

山梨県  
甲州市

明治時代のはじめ、日本の近代化が急速に進むなか、政府主導のもとに官営のワイン醸造が始まった。江戸時代からブドウの産地として知られていた山梨県は、まさにその先駆けであった。

明治10(1877)年、祝村(現在の山梨県甲州市勝沼町)に日本初の民間ワイン醸造場「大日本山梨葡萄酒会社」が設立される。同年、日本産のワイン製造の夢を抱く土屋龍憲(助次朗・当時19歳)は、同志の高野正誠とともに社命によりフランスへ渡る。およそ1年半後、帰国した龍憲らは本場で学んだブドウの栽培法と醸造技術を駆使し、日本固有種の甲州ブドウでの本格ワイン醸造を始めた。

渡仏を後押ししてくれた明治政府の期待に応えるべく、明治12(1879)年、龍憲らは念願の国産本格ワインを完成させる。のちに高野家の蔵から見つかった未開封のワイン2本は「最古の日本ワイン」とされ、龍憲らの夢と情熱が詰まった結晶として大切に保管されている。こうして第一歩を刻んだ日本のワインづくりだが、技術面の不足や日本人がワインに馴染みがなかった

ことなどが原因で、10年を待たずに会社は解散。それと同時に政府主導のワインづくりも頓挫した。

龍憲は会社で一緒に醸造を手がけていた宮崎光太郎とともに、明治22(1889)年、東京に「甲斐産商店」を開くが、翌年には光太郎に譲り、個人で醸造を続けると、そこにワイン醸造を志す多くの若者が集まった。そのうちの一人が新潟県北方村出身で、のちに「マスカット・ベリーA」などのブドウ品種を生み出した川上善兵衛である。日本独自の甲州ブドウと善兵衛が生んだ赤ワイン用のマスカット・ベリーAは、最も醸造量が多い品種として、現在も君臨している。

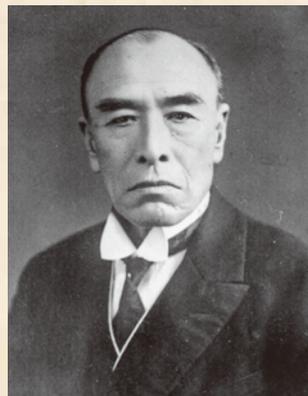
龍憲とともに歩み、その醸造技術を学んだ宮崎光太郎は、明治22(1889)年に自宅に醸造場を設け、甲斐産商店を切り盛りするが、なかなか軌道に乗らない。当時の日本人の多くはワインの味を好まなかったのだ。考えた末、もともと実業家肌である光太郎は方針を転換し「エビ葡萄酒」など甘味ワインに力を注ぐ。これは、ワインにハチミツや漢方薬を混和し独特の甘味を持たせたもので、その飲みやすさから好評を博していく。



高野正誠(左)と土屋龍憲(右)



明治12年産の日本ワイン  
フランスから帰国後初めて醸造した、最古の日本ワイン。  
永久保存を念頭に、松ヤニで密封されている。



宮崎光太郎



大黒天印甲斐産葡萄酒と  
甲斐産エビ葡萄酒  
「大黒天印甲斐産葡萄酒」は土屋龍憲と宮崎光太郎が醸造した本格ワイン。「甲斐産エビ葡萄酒」は後に宮崎が甘味料を入れて飲みやすしたものだ。



明治十年全十一年中往復記録  
高野正誠と土屋龍憲がフランスに醸造を学びに行った13か月の出来事を書いた書簡。



大日本山梨葡萄酒会社関連資料  
日本初の民間ワイン会社の帳簿など。



帰航船中日記  
土屋龍憲が記したフランスからの帰りの航海日記で、船から見える風景や寄港地の様子が記されている。

STORY 2

## 日本初「シャトー」完成、一貫体制で大規模生産化

茨城県  
牛久市

実はこの甘味ワイン、光太郎よりも先に東京で製造・販売していた人物がいた。「神谷バー」の創業者・神谷傳兵衛である。傳兵衛は17歳のころ(1873年)、横浜のフランス人商会で働いていたが、病気で衰弱し、主人の勧めたワインで体調を回復させてその滋養を知った。以来ワインに興味を抱き、明治14(1881)年に考案、発売したのが「蜂印香窠葡萄酒」だった。輸入ワインにハチミツや漢方薬を加えて飲みやすくしたもので、甲州市の宮崎光太郎はこれにヒントを得たのである。

やがて、甘味ワインは大人気を博すも、傳兵衛は満足しなかった。「このワインを日本国内で醸造し、一大産業にしたい」というのが彼の夢だったのだ。傳兵衛は甲州市でワイン醸造が産業化しつつあることを知っていた。それに倣い、かつて甲州の若者が旅

立ったように、婿養子の神谷傳蔵をフランスへワイン留学に派遣。自身は国内でのブドウ栽培適地を探し当てた。その場所こそ、現在の牛久市にあたる茨城県稲敷郡の約120ヘクタールもの原野である。傳兵衛はこれを開墾し、ブドウの苗木6,000本を移植した。そして明治36(1903)年、2年の歳月をかけて「牛久醸造場」(現・牛久シャトー)が完成。帰国した傳蔵の知識をもとに、ボルドー地区の最新様式を取り入れた本格的なワイン醸造場であった。

傳兵衛はブドウ園・醸造場・牛久駅をむすぶトロッコ列車を走らせ、工員らの移動や大量の輸送も実現させた。こうして、ブドウの栽培からワインの醸造、貯蔵、瓶詰出荷まで一貫した製造工程を有する日本初の本格的なワイン醸造場へと「牛久シャトー」を発展させたのである。



神谷傳兵衛



牛久シャトーとその周辺(明治44(1911)年)



蜂印香窠葡萄酒販売宣伝用ポスター

親友で最大の事業協力者でもある近藤利兵衛の優れたマーケティング活動により、1900(明治33)年頃には全国で人気商品となった。

### 「香窠」の由来

趣味人であった、父兵助の俳句の雅号。初代 神谷傳兵衛は、親の恩を忘れぬために新しい甘味ぶどう酒にこの名を付けた。

- 香—— 黍(きび)+甘の合字。穀類や果実などから生ずる甘いかおりを表す。
- 窠—— 「かくれる」の意味。
- 香窠—— 豊かなかぐわしい香りが、ひっそりとかくれ忍んでいるさま。(静かに熟成の時を待つ樽の中のワインのように)



蜂印香窠葡萄酒

## 地域ぐるみでつくる一大ワイン産地の確立

こうした流れを受け、一方の甲州市では大正元(1912)年、宮崎光太郎が自宅にワイナリー「宮光園」を開設し、醸造場の見学、ブドウやワインの飲食や購入ができるスタイルを確立した。今では当たり前となったワイナリーのスタイルが初めてできたのである。また光太郎は地元のブドウ農家との共存繁栄を図り、援助を積極的に行って勝沼を一大ワイン産地へと押し上げた。このため勝沼には地元農家や寺院が営む中小のワイナリーが次々と生まれ、ブドウ畑とワイナリーが共存する風景が誕生した。

牛久市では神谷傳兵衛が日本初のシャトー（一般的に栽培から醸造・出荷までを行うワイナリーを指す）において、ブドウ栽培から瓶詰まで一貫した体制を確立し、大規模生産を実現。甲州市では宮崎光太



宮光園で皇族のブドウ狩り(昭和2(1927)年)



甲斐産商店記念観光会のツアー(明治36(1903)年頃)



宮崎葡萄酒醸造場でのワインづくり風景

郎ら先覚者がブドウ生産とワイン醸造を分業で行う伝統的手法を地域ぐるみで行い、現在に見られる大規模なブドウ畑とワイナリー群を築き上げた。明治から大正にかけて、中央線と常磐線が開通して首都圏への大量輸送体制も確立。牛久産ワイン、甲州産ワインともに大量に出荷されていった。

牛久市と甲州市は、国産で果たせなかつた国産ワイン製造を民間の力で成し遂げ、それぞれが持つ地域の特色を生かし、競い合う形で日本社会へのワインの普及や発展に大きく貢献した。そして神谷傳兵衛、宮崎光太郎の両雄が普及させた甘味ワインが広まったのち、日本にも徐々に本来の渋みのある本格ワインが浸透。昭和50年ごろからは本格ワインへとニーズが移り、今に至っている。



牛久シャトー事務室2階での祝宴(ワインパーティー)の様子  
大正2(1913)年10月13日[板垣退助]

傳兵衛は、実業家以外の諸名士とも交流があった。政治家では勝海舟、山岡鉄舟、榎本武揚、曾禰荒助、板垣退助、土方久元、軍人では大山巖、児玉源太郎、西郷従道らと親交があり、その結果、多くの偉人たちが牛久シャトーを訪れた。



牛久シャトーでのワインづくり風景

## 日本ワインの聖地ならではのシビックプライド

牛久市には傳兵衛が建てた、ヨーロッパの古城を思わせる「牛久シャトー」が現存する。建物外観はもちろん、内部に残るワイン樽や醸造用具、トロッコ軌道跡は日本ワインの発祥地としての歴史を雄弁に物語る。毎年春の桜まつりでは、今も残るブドウ園の周辺が約200本の桜で彩られ、多くの人々で賑わうなど「牛久シャトー」はまちのシンボルとなっている。

甲州市では宮崎光太郎が明治37(1904)年につくった第二醸造場が資料館として公開され、また光太郎の私邸も近代産業遺産「宮光園」として公開され

ている。醸造場として使われた日本家屋内で、ワイン醸造の歴史が学べるなど、周辺にある30ものワイナリーとのパイプ役にもなっている。

両市では、市民や醸造者が世界中から訪れる観光客との交流を楽しむ様子が見られる。日本ワイン発祥地ならではの郷土への愛着のあらわれだろう。両市の人々は相互に交流を図りながら、日本ワインのさらなる成長と広まりに取り組んでいる。この二つのまちを訪ね、140年前から続くワイン文化を理解することで、日本ワインの味わいも一層深いものとなるだろう。



桜と牛久シャトー(牛久市)



神谷稲荷神社(牛久市)

ワイン生産と商売繁盛を祈願し、神谷傳兵衛の出身地(愛知県)にある豊川稲荷から、シャトー開設前年の明治35(1902)年に勧請した。神谷傳兵衛のワイン生産の決意をうかがえる場所である。



登録有形文化財

伝統あるワイナリー(甲州市)

- ①原茂ワイン店舗兼主屋/原茂ワイン東蔵・西蔵  
原茂ワイン奥蔵
- ②丸藤葡萄酒工業旧醸造蔵/丸藤葡萄酒工業瓶貯蔵庫
- ③勝沼醸造主屋兼事務所/勝沼醸造樽貯蔵庫
- ④くらむぼんワイン旧主屋/くらむぼんワインワインセラー

日本ワインの黎明期を物語る、創業100年の歴史をもつワイナリー。その多くが和風建築のワイナリーで、ワイン産業が勝沼地域の地場産業として定着したことを物語る、他の生産地にはない特徴である。



大善寺のワイン文化(甲州市)

明治中期に、ブドウとワインの地産地消を図るため「葡萄酒愛飲運動」が興り、日本酒からワインへの切り替えが進んだ。柏和葡萄酒を醸造している大善寺では、住職と檀家がワインを醸造し、祭事・神事には御神酒として必ずワインが振る舞われ、勝沼の地にワイン文化が根付いていることを示している。

茨城県

# 牛久市

田園や里山が広がる豊かな自然環境と、充実した都市機能を併せ持つまち。

牛久市教育委員会 文化芸術課

〒300-1234 茨城県牛久市中央3丁目20-1(牛久シャトー内)  
TEL029-874-3121 MAIL bunkazai@city.ushiku.ibaraki.jp



## シャトーカミヤ旧醸造場施設醸造用具

明治期のワイン醸造の様子を物語る醸造用具。当時の醸造工程に本場フランスの先端技術を導入していることがわかる。



## 牛久葡萄酒・各国博覧会受賞牌

100年以上前に牛久シャトーで生産されたブドウ酒。未開封の状態に残されている。明治時代のイギリスやフランスで開催された博覧会に出品し、金賞を受賞していることから、海外においても高く評価されていたことがわかる。



## 牛久シャトー所蔵資料

明治から大正期に神谷葡萄園を訪れた芳名録や神谷傳蔵(2代目神谷傳兵衛)がヨーロッパ留学から持ち帰ったブドウ栽培及びワイン製造関連の文献資料、明治天皇葡萄献上時書状や当時の古写真などが保管されている。



事務室



醱酵室



貯蔵庫



事務室2階

国指定重要文化財

## シャトーカミヤ旧醸造場施設3棟(事務室・醱酵室・貯蔵庫)

明治36(1903)年に神谷傳兵衛が建設した日本初の本格的ワイン醸造場(牛久シャトー)。ヨーロッパの古城を思わせる事務室など、明治時代の洋風ウィナーの世界を体験することができる。

住所/茨城県牛久市中央3-20-1 TEL/029-873-3151 開館時間/10:00~16:00  
定休日/年中無休(年末年始及び臨時閉館あり) アクセス/JR常磐線「牛久駅」下車東口(シャトー口)より徒歩約8分

## 神谷傳兵衛墓地跡及び神谷翁記念碑

当初神谷葡萄園跡地の一角に神谷傳兵衛の墓地があったが、その後墓は東京に移され、現在は日本のワイン翁を称える記念碑が残されている。碑は地元住民が建てたもので、傳兵衛の偉業を称えたものである。



## 神谷葡萄園トロッコ軌道跡

神谷葡萄園内に敷設されていたトロッコ軌道跡。現在は生活道路として利用されており、当時の面影を残している。

## 牛久シャトーのワイン醸造システム

ブドウ畑で収穫されたブドウは、トロッコ軌道によって建造物正面まで運ばれ、2階の大きな開口を通じ、小型起重機を用いて2階へ搬入される。そこでブドウ果汁が生成され、2階床板へ等間隔に穿たれた小窓を通じ、下に並べられた1階の「醱酵桶」へブドウ果汁を流し入れて、一次醱酵が行われる。このワイン醸造システムは、日本で牛久シャトーだけである。

現在は展示スペースとして公開されており、醸造用具や牛久シャトーの歴史を学ぶことができる。



小型起重機でブドウを2階へ搬入する様子

醱酵室2階(明治36年)

現在

トロッコ軌道

醱酵桶に対応する小窓

中2階

醱酵桶

貯蔵桶

醸五造の台

醱酵室1階(明治36年)

現在

# 山梨県 甲州市

広大な山岳地帯や渓谷、人々の営みの中で培われた果樹園や農村集落、歴史に彩られた建造物や文化資産が美しく調和した魅力あふれるまち。

甲州市教育委員会 文化財課

〒404-8501 山梨県甲州市塩山上於曾 1085-1  
TEL0553-32-5076 MAIL bunkazai@city.koshu.lg.jp



## 宮光園資料

宮光園に所蔵されている、皇族をはじめ多くの著名人の名が記された芳名録や帳簿等の資料など、歴史や文化を学ぶことができる資料を公開している。



## 宮光園 35mm フィルム

宮光園主屋修理中に発見された 35mm 映画フィルム。大正時代のブドウ栽培、ワイン醸造、観光ブドウ園の様子が記録されている。当時としては画期的な、動画を宣伝媒体として使用していた。

市指定文化財

## 旧宮崎葡萄酒醸造場施設(宮光園)

明治 25 (1892) 年に宮崎光太郎が私邸に建設した醸造場で、後に観光ブドウ園もあわせて宮光園と称した。現在は甲州市が公開・活用しており、日本におけるワイン産業黎明期のワイナリーの特徴を知ることができる。

住所 / 甲州市勝沼町下岩崎 1741 TEL / 0553-44-0444

開館時間 / 9:00 ~ 16:30 (受付は 16:00 まで)

定休日 / 火曜日 (祝祭日にあたる場合は、その翌日)、年末年始 (12月28日~1月4日)

アクセス / バス : JR 中央本線「勝沼ぶどう郷駅」から市営バス (勝沼コース2)

「ワイン村河川公園前」下車

車 : 「ぶどうの国文化館」または「シャトー・メルシャン」駐車場を利用。中央自動車勝沼インターから R20 を甲府方面へ「下岩崎」交差点を右折。

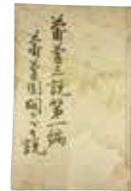
県指定文化財

## 旧宮崎葡萄酒醸造場施設 (宮崎第二醸造場)

明治 37 (1904) 年建築の宮崎葡萄酒の第二醸造場で、現在はメルシャンワイン資料館として公開されている。

## メルシャンワイン資料館収蔵品

明治から大正期の、大規模醸造にかかわる用具が収集・展示されており、「宮光園 35mm フィルム」の中で使用しているところが見られる。



## 『葡萄三説』及び葡萄三説草稿

渡仏した高野正誠が、ワインの本場フランスで学んだ理念や知識だけでなく、ブドウ栽培やワイン醸造に関する道具類までも記した技術書で、草稿には渡仏を手引きした前田正名が校正をした朱書きが残る。



## 葡萄栽培并葡萄酒醸造範本

フランスでの伝習活動を終了した土屋龍憲が、三田育種場長の前田正名に提出した伝習の報告書。



## 龍憲セラー

明治期につくられた半地下式煉瓦造ワイン貯蔵庫。当時の最先端の技術を、ワインの品質管理のためセラーに応用している。



## フランス渡航誓約書

高野正誠と土屋龍憲がフランスで技術の習得に全力を挙げることを会社に誓約していることがわかる。



## 馬の水飲み場

駅までの輸送は馬に頼っており、馬の労をねぎらうため、道路の脇に石組の馬の水飲み場がつけられた。



## 旧田中銀行社屋・旧田中銀行土蔵

登録有形文化財

明治 30 (1897) 年に勝沼郵便電信局として建築され、大正 9 (1920) 年に銀行類似会社山梨田中銀行となり、その際煉瓦造土蔵が建てられた。醸造用ブドウの大量買付けに出資するなど、各社のワイン増産体制を支えた会社の面影を残す貴重な建物である。



## 旧大日影鉄道隧道・旧深沢鉄道隧道及び周辺の隧道遺構

明治 35 (1902) 年に完成した旧中央本線煉瓦造トンネルと、同時期に造られた煉瓦造トンネル。翌年の鉄道開通はブドウ・ワインの東京への大量輸送を可能にした。現在は、トンネルの構造を確認することができる施設としてのほか、勝沼トンネルワインカーヴ(貯蔵庫)として保存活用されている。



登録有形民俗文化財

## 勝沼のぶどう栽培用具及び葡萄酒醸造用具

大正時代頃から現代まで使用されてきたブドウ栽培とワイン醸造に関する用具類。勝沼におけるワイン醸造の歴史を物語る貴重な資料である。



登録有形文化財

## 祝橋

昭和 6 (1931) 年に建設されたコンクリートアーチ橋。以前は木造の吊橋だったが、コンクリート造への変換により、ブドウ・ワインの勝沼駅への大量輸送が可能となった。

## 柏尾山大善寺

国宝・重要文化財

養老 2 (718) 年開創と伝わる古刹で、関東最古の本堂は国宝に、本堂内に安置される本尊薬師如来と両脇侍像 3 軀、十二神将立像 12 軀、日光月光立像 2 軀は重要文化財に指定されている。ブドウ発祥の伝承があり、境内で栽培されたブドウを使ってワインを醸造し、寺で提供するなど、まさに甲州市勝沼を象徴する寺院である。

住所 / 甲州市勝沼町勝沼 3559 TEL / 0553-44-0027

開館時間 / 9:00 ~ 16:30 (12月~3月は 16:00 まで)

定休日 / 不定休

アクセス / JR 中央本線「勝沼ぶどう郷駅」からタクシーで 5 分



ブドウを手にする本尊薬師如来

# 甲州市構成文化財 MAP

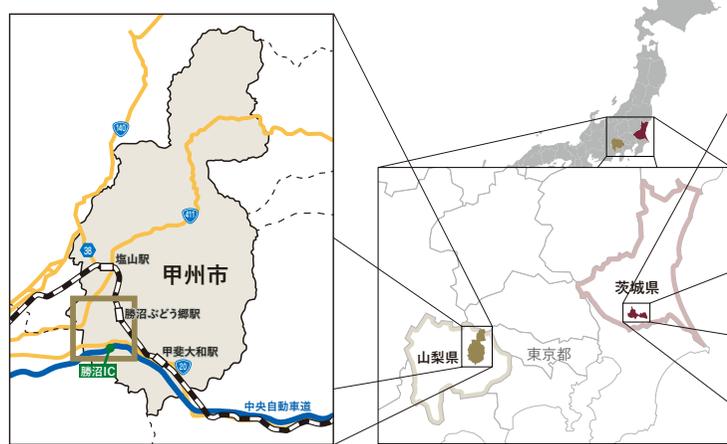


# 牛久市構成文化財 MAP



## 甲州市へのアクセス

電車の場合	東京方面から	新宿駅	JR 中央本線	約1時間40分	勝沼ぶどう郷駅
	松本方面から	松本駅	JR 中央本線	約2時間	勝沼ぶどう郷駅
自動車の場合	東京方面から	新宿	中央自動車道	約1時間30分	勝沼IC
	松本方面から	松本	中央自動車道	約1時間30分	勝沼IC
	御殿場方面から	御殿場	中央自動車道	約1時間30分	勝沼IC



## 牛久市へのアクセス

電車の場合	東京方面から	東京駅	JR 常磐線(上野東京ライン)	約52分	牛久駅						
	水戸方面から	水戸駅	JR 常磐線	約70分	牛久駅						
自動車の場合	東京方面から	都内	常磐自動車道	約40km	つくばJCT	圏央道	約1km	つくば牛久IC	国道408号	約6km	牛久市
	成田国際空港から	成田国際空港	新空港自動車道	約5km	成田JCT	東関東自動車道	約5km	大柴JCT	牛久阿見IC	約30km	牛久市
	茨城空港から	茨城空港	県道	約20km	千代田石岡IC	常磐自動車道	約25km	つくばJCT	つくば牛久IC	約11km	牛久市
	つくば牛久IC	つくば牛久IC	圏央道	約1km	牛久市						
	つくば牛久IC	つくば牛久IC	国道408号	約6km	牛久市						





JAPAN HERITAGE

日本遺産

## 日本遺産とは

地域の歴史的の魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産(Japan Heritage)」として文化庁が認定するものです。

ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。



Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

令和2年度  
文化資源活用事業費補助金  
(観光拠点整備事業)

### ■ワイン文化日本遺産協議会

茨城県牛久市 〒300-1292 牛久市中央 3-15-1

Tel 029-873-2111(代表)

山梨県甲州市 〒404-8501 甲州市塩山上於曾 1085-1

Tel 0553-32-2111(代表)

【編集】茨城新聞社・山梨日日新聞社

【制作・印刷】サンニチ印刷